



句碑のできた話

俳誌「春月」主宰
元大蔵省造幣局長・俳人協会理事長

とつね はるひと
戸恒 東人

俳句に取り組み始めたのは、25歳の時なので、かれこれ50年経った。大蔵省勤務時代の平成3年4月から個人俳誌「東風句報」(のちに「春月」と改題)を毎月発行していたが、大蔵省を退職した後の平成11年4月より結社誌「春月」を創刊し、主宰となった。「春月」は、令和2年12月号で、通巻357号となるので、約30年間毎月発行で頑張ってきたことになる。

この間、句集を10冊、評論・エッセイ等9冊、俳句教本2冊、俳句アンソロジーを4冊出版し、現俳壇内でも著作は多い方といえる。そのうち平成23年に出した『誓子—わがこころの帆』は、加藤郁乎賞を受賞した。

毎月指導する俳句会は、10ほどあるが、これまではほぼ皆勤で会員の指導に当たっている。また会員の出版した句集の数も30冊を超えている。

そんな中、令和元年夏の横浜の句会で、会員の永倉嘉行氏から、自分の寺に先生の句碑を建ててくれないかとの要望があった。句碑を建てるのは、敷地の取得や石材等のあれこれを含めて、150万円から300万円は掛かると聞いていたので、辞退すると、場所も石材も永倉氏持ちとのことだったので、ありがたく作らせていただくことにした。

永倉嘉行氏は、藤沢市片瀬の日蓮宗龍口山常立寺じょうりゅうの住職で、常立寺は江ノ電江ノ島駅から北に徒

歩3分のところにある梅の寺としても有名な寺である。境内には鎌倉時代の元寇の際、わが国に降伏を勧めに来日した元の使者5名が処刑されたことを申す「元使塚」がある。

私は、この寺に相応しい俳句を作るために、たびたび常立寺を訪れて、境内の樹木や江ノ島からの潮風の匂いを嗅いだ。そして結局、

よき風のここになご和みて梅の寺 東人

という一句を得た。令和改元と新元号の典拠となった『万葉集』の梅花の宴の和歌とをモチーフにしたものである。

句碑の石は、高さ約80センチ、幅120センチほどの木曾石の自然石で、重量800キログラム。その石に長方形の小松石を貼り付けて、小松石に私が揮毫した我が句を彫っていただいた。

句碑は常立寺山門に入って左側の梅の木の下に置かれている。令和2年2月23日(天皇誕生日)に句碑除幕式を催行し、梅の香りが漂う中、来賓及び会員40名ほどが参会した。

